

News Letter

NEWS LETTER No.54 April 2019

Contents

- ▶「オープンダイアログ・ワールドカンファレンス」事業完了報告 …… 1
- ▶STAFF INTERVIEW Vol.2 …… 2
- ▶会費等報告 …… 4
- ▶バザー報告 …… 4
- ▶CENTER NEWS …… 4



「オープンダイアログ・ワールドカンファレンス」事業完了報告 2018年度日本郵便年賀寄附金助成事業

東京大学安田講堂 (2月3日)

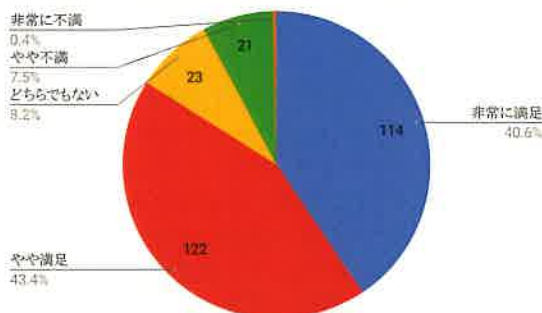
2019年2月3日(日) 東京大学安田講堂(東京開催)、および2月9日(土) 龍谷大学響都ホール校友会館(京都開催)にて、「オープンダイアログ・ワールドカンファレンス」をオープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン(ODNJP)共催事業として開催いたしました。オープンダイアログとは、1980年代からフィンランドで実践されてきた精神科医療・精神保健のアプローチであり、近年この手法が日本の精神科医療等で大きな注目を集めています。本事業では日本国内でのオープンダイアログの実践をすすめるため、自らの国や地域に根付かせる実践に取り組む各国の講師を招聘し、海外での実践のお話をうかがいながら、われわれにとって必要となる視点や今後の課題を検討いたしました。

今回お招きした講師の方々には、本シンポジウムが日本での初めての講演となる方も多く、我が国での実践に向けて大変貴重な機会になったと考えております。東京・京都の両会場あわせて約600名もの方々にご来場いただき、大変盛況な会となりました。開催後のアンケートでは、299件のご回答を頂戴し、本事業の満足度では84%の方から高評価をいただくことができました。この結果に安堵することなく、お寄せいただいたご意見やご指摘につきましては真摯に受け止め、今後の事業において改善の努力をしてみたいと思っております。

なお、本事業は日本郵便様より多額の助成を賜り、実現可能となりました。またODNJP、ACT-Kの皆様には開催にともない多大なるご協力をいただきました。改めてここに御礼申し上げます。

ひきつづき当センターでは、斎藤環先生による「ひきこもりダイアログ」講座にてオープンダイアログの活用・実践を広めてまいりたいと考えております。

内容の満足度



講師紹介

- 斎藤 環氏 精神科医、批評家。筑波大学教授、ODNJP 共同代表
- 向谷地 生良氏 北海道医療大学教授、社会福祉法人浦河べつへの家理事 (東京開催のみ)
- Douglas Zidonis氏 精神科医、公衆衛生学修士。マサチューセッツ・メディカルスクール大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校所属 (アメリカ)
- Mark S. Hopfenbeck氏 社会人類学者。ノルウェー科学技術大学所属 (ノルウェー)
- Mary Olson氏 医療ソーシャルワーカー。マサチューセッツ・メディカルスクール大学、スミス・カレッジ・フォー・ソーシャルワーク所属 (アメリカ)
- Shi-Juan Wu氏 家族療法を専門にセンター・フォー・クリエイティブ・ダイアログ代表、The Taos Institute 所属 (京都開催のみ) (台湾)

STAFF INTERVIEW

VOL.2

昨年の秋よりスタートいたしました「STAFF INTERVIEW」。第2回目の今回は居場所支援活動を行っている「茗荷谷クラブ」から、2名のスタッフ（井利・倉島）の声をお届けいたします。

「茗荷谷クラブ」とは1988年から活動を開始。生きづらさを抱えた方たちに向けて〈来ているだけでよくなる居場所〉として居場所支援活動のほか、「よつば庵」（40歳以上）、「女子会」（女性限定）、サッカー活動、イベント活動（一泊旅行、クリスマス会 etc.）、「親とスタッフの会」など、幅広い活動を行っている。

——青少年健康センターに関わるようになったきっかけは？

井利 私は普通の会社に勤めた後、結婚して専業で子育てを10年ぐらやっていたんですね。その間に小学校のPTAとかでいろいろと学校に関わっているうちに、その当時の学校に対して「おかしいな」と思うようになって。たとえば給の紙包みが校内にひとつ落ちていたら全員が体育館に集められて、「誰が舐めたか正直に言いなさい」みたいな、すべてがそういう感じで。母親の私が学校に何か言ってもまったく聞いてもらえなかった。ちょうどそのころ、不登校問題も出てきていて、「やっぱりこんな学校に疑問を持っている子たちがどこかにいるに違いない。そういう子たちと会いたいな」って思ったんですね。私自身、学生時代は哲学科で心理学を専攻していて、そもそも「人間」とか「自分」、「生きる意味」というものに対して興味があったんですよね。それで当時、朝日カルチャーでやっていた藤光純一郎先生の講座に出たんです。それがきっかけとなって、藤光先生に茗荷谷クラブを教えていただいて。スタッフ採用の面接を受けたら、たまたま人が足らなかったのか「研修生としてだったらいいですよ」と、運良く入れてもらえた。それが26年前の話ですね。それから5、6年経ったころ、チーフだった方が辞められてしまったので、私が引き継ぎました。

倉島 私がセンターに入ったのは1989年で、今年でちょうど30年になりますね。もともと同級生が不登校だったり、学校でいじめがあったり、先生が体罰をするなど、教育のあり方に疑問を持っていました。その教育、心理や福祉を考えるには法律が必要なんじゃないかと思って法学部に行ったんですけど、自分が思っているのとは違ったんですね。それで医学部や教育学部の心理系の授業とか出たりしていろいろと探しているなかで、東大の保健学科卒で開業してカウンセラーをやっている方がいて、ひきこもりの方を対象に訪問相談みたいなことを始めていたんです。その先生からここを紹介してもらいました。でも、クラブはもう人がいっぱい、そこで鶴見（横浜市）のハウス※1のスタッフとして入らせてもらったんです。ハウスでは利用者さんと一緒にいて、そしていろいろな活動をして、という感じでした。みんなと映画を観に行ったり、ゴルフの打ちっぱなしに行ったりして、楽しかったですね。その後、ハウスは一旦休止となったので、「じゃあクラブどうですか？」と声を掛けてもらいました。

——印象に残っていることは？

井利 来ているメンバーの方たちはすごくいい人たち、透明な感じの方たちばかりで、「ああ、こういう方たちが出て

行けない学校（社会）ってやっぱりおかしい」、そして「みんなの話をいろいろと聞きたい」と思いましたね。でも研修生だったので、「この場に自分がいていいのかな」「誰かの役にちゃんと立っているのかな」とか、ずうっと悩んでいる感じだったんです。その思いを当時のスタッフがすごく真剣に聞いてくれて、それがうれしかったですね。

倉島 私もスタッフの仲の良さ、受け入れてくれていてという雰囲気はとても印象にあります。ここには自由な雰囲気もあって、私にはありがたかったですね。それからいま井利さんがおっしゃったみたいに「自分はここにいていいんだらうか」という思いが、私もずうっとあって。昔は、男性のスタッフは煙たい存在みたいになってしまっていて、「メンバーさんたちに対して何か意味のあることができているのだろうか」と。それでも何年か続けていくうちに、たとえば井利さんとしか話せなかったメンバーさんとちょっとずつ話ができるようになってきたりとか、他の人と何人かでゲームができるようになったりとか、いろいろな変化が見えてきて、「ああ、メンバーさん自身の成長の度合いにこちらがどうやって寄り添っていけるかっていうのが大事であって、自分が役に立っているのかどうかなんていうのは重要じゃないんだな」というのを実感しましたね。メンバーさんに変なことや嫌なことはしないで（ダジャレは言いますが……）、ただ近くにいるだけでいいかなと思います。

——茗荷谷クラブはお二人から見るとどんなところですか？

井利 ええ、そうですね。クラブではやりたいと思うことをみんなが自由に表明できて、それをやれるというところもいいですね。「メンバーさんのニーズに応じてこれがやりたい」となったら、それをみんなで一緒にどんどんやっていける感じです。この間も初の試みとして文化祭をやりました。すごく楽しかったです。

クラブには10代から40代以上の方まで、幅広い年齢層の方がいらっしやいます。その背景も悩んでいることも様々です。一人ひとりに見合ったご相談を並行してやっています。メンタル部門相談室にいらっしやる方は、クラブに来ていてカウンセリングを希望される方もいますが、外部の方が中心になっています。その半数以上が親御さんですね。最近はお母さまだけでなく、お父さまも増えましたね。ご夫婦そろってお見えになられたり、ご本人も含めてご家族でいらっしやることもあります。

倉島 当初はセンター近隣というより、少し離れた地域、神奈川、千葉、埼玉とか他県のご利用者さんのニーズが高かった気がしますね。やっぱり地元にはあんまり行きたくない



井利 由利

公認心理師、臨床心理士、精神保健福祉士。茗荷谷クラブのチーフスタッフとして、居場所支援活動ならびにメンタル相談部門で個別相談活動に従事。



倉島 徹

公認心理師、精神保健福祉士。ハウススタッフを経て、クラブの居場所支援活動ならびに個別相談（メルクマールせたがや）に従事。

という思いもおありなのかもしれませんね。まあ昔は今と違って、支援をするところがあまりなかったですからね。

井利 少し離れたところからクラブにいらっしゃる方々は、それが気分転換にもなるのかもしれませんがね。

——茗荷谷クラブの強み、あるいは改善すべき点は？

井利 現在、私たちは「専門家集団」としてアピールしている部分もありますが、さらにもっといろいろな職種の人を迎え入れて、多くの知見から連携・協働をしていかなければならないと思っています。

倉島 そうですね。昔は、教員の方もいたりしましたね。

井利 風通しよくやっていくということは必要ですよ。

倉島 あと、私たちは国内のひきこもり支援黎明期から活動し、その道を拓いてきたという実績の面もありますが、近年、NPOとか他の団体がいっぱい増えてきているなかで、自分たちの独自性や方向性をどう打ち出していか。クラブでは40歳以上の方を対象とした「よつば庵」などを開催していますが、10代の方に対してはどうしていくとか、社会参加の場をもう少し広げていくためにはどうしたらいいとか、いろいろありますね。企業や学校の人の理解がもう少し進むとありがたいかなと思っています。

井利 学校も企業も地域も、なんかまだまだですよ。どんな若者でも生き活きとできるようにならないといけないなかで、成果主義とか能力主義とかそういったものはもう変わっていかないと。「共生」とか方針は出ているんだけど、具体的にはなかなか行ってないと思いますね。

倉島 国が思い切って主導していかないと難しいんじゃないのかなって印象が個人的にはあります。いま働くことができない人の中には、働ける場所さえあれば働けるという人、いっぱいいると思うんです。ただ自分から声をかけられないだけで。

井利 働ける場をどう用意するかっていうのがすごく大事だと思いますね。クラブでも企業に働きかけを行い、企業との間で関係を築き、そういう関係をさらに増やしていく努力をしています。なかなか難しいんですけど、少しずつではありますが社会貢献に理解のある企業さんが増えてきたり、あと、ショートタイムワーク制度※2とか始まったりとかね。

倉島 そうですね。企業に限らなくても、たとえば高齢の方たちの買い物を1時間500円で手伝ったりとか、働きづらさを抱えた若い人が入っていけるような地域のネットワークなんかでもできたらいいですよ。

——今後の目標は？

井利 「続けていく」ということですね。クラブの理念の4本柱は、「寄り添い」「活動」「仲間」「主体性」です。開始当初から変わりません。あとは、国や都とかに対して私たちがやっていること、そしてメンバーさんの声を発信して、それで若者支援ってどうあるべきかということが今後、少

しずつでも変わってくればいいかなと思います。現在は、ようやく「若者支援をしなれば」と行政が動き出したばかりの状況ですからね。

倉島 職務上の「目標」とは少し違いますが、今後、親御さんが亡くなって一人で暮らす若者たちに対して、どういう支援のあり方がいいのかなと個人的に思うところがあるんですよ。北海道の「べてるの家」※3や、福祉学界でいま提言されているような「福祉署」などのようなコミュニティができるといいんじゃないかなと思っています。まだまだイメージの段階ですけど、たとえば余っているアパートを活用したりして、若者だけじゃなく、一人暮らしの高齢の方とかちっちゃい子どもさんとか、みんなで支え合えるような場所ができたらな、と。

——このニュースレターを読んでいらっしゃる方に向けてメッセージを。

井利 皆さんのいろんな声を聞かせていただきたいです。いまの社会上の問題を肌身で感じていらっしゃる方々の〈現場の声〉を聞かせてもらいたい。そして、私たちはそれを社会に向けて発信して、伝えていきたい。いまは大変だけれども、ひきこもりの方々は社会に向かって警鐘を鳴らすという非常に大事なことをやっています。大変さは大変さとしてあると思うので、その具体的なところは一緒に考えてよりよい方向へ行けたら、と思っています。

倉島 メンバーさんにも親御さんにも「声をあげちゃいけないんじゃないか」「支援者に言ってもわかってもらえないんじゃないか」という思いがおありかもしれませんが、そういう思いもこちらにぶつけていただきたいです。もちろん私たちにもわからないことはいっぱいあります。なので、皆さんと一緒に模索していきたい。それから、皆さんは私たちにないものをたくさん持っていらっしゃると思うので、「こういうことができるよ」「こんなアイデアがあるよ」と教えていただきたいです。

井利 あと、クラブにご見学に来ていただきたいですね。40代以上の方もお待ちしております。親御さんだけでもぜひお越しいただいて、お家での話のタネにいただければと思います。ただ、「お母さんが見学行っただから、あなたも行きなさい」とお子さんにプレッシャーをかけるのではなく、「こういうところがある」と単に情報としてお渡ししていただけるといいですね。何年か経ってから「あのとき情報をくれたのはうれしかったし、助かった」とおっしゃる方がじつは多いんですよ。

※1 1987年に開設。ひきこもり等の若者たちの宿泊型グループ施設。2010年より休止中。
※2 障害等の理由によって長時間勤務が困難な人が週20時間未満で就業できる雇用制度。
※3 1984年に設立された北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点。

会費・寄付金・助成金・補助金報告 (平成30年11月～31年3月)

青少年健康センターは大勢の個人の方々のご献金、および団体・企業様の助成金、ご寄付、補助金などによって支えられています。ここに心から感謝申し上げます(敬称略)。

【正会員】	鈴木 光代 園田 章 能勢 孝子	計:	60,000円
【維持会員】	大山 俊介 生出 美穂 北川由布子 佐藤 正吾 野上 清水 藤井 忠幸 宮崎 圭子	計:	70,000円
【SW会員】	SW会費+維持会費 8名: 120,000円	SW会費のみ 48名:	480,000円
【寄付・個人】	足立 房夫 有馬 恵子 石井 良信 稲村 優子 石村 愛子 大野レイ子 小川 栄子 各務 真紀 神田 玲子 菊池 章 小松ひろみ 齋藤友紀雄 嶋田 大子 神保 光代 杉山 恵子 鈴木 厚一 舘 裕子 玉水 則子 千葉 操子 常廣 澄子 寺嶋 公子 時盛 昌幸 中山 正恵 西澤 聖長 西澤恵美子 橋本 進 波多野瑞穂 原田 玲子 廣瀬 清晃 堀田八重子 堀井 茂男 松本 寿昭 柳下 弘 山下 保則 匿名 2名	計:	700,000円
【寄付・団体】	ウエスト東京ユニオンチャーチ、北の丸カウンセリングセンター 日本キリスト教団 阿佐ヶ谷協会、日本キリスト教団 西川口協会	計:	380,000円
【助成金・補助金】	丸紅基金 610,000円	計:	610,000円

青少年健康センター本部にてバザーを開催いたしました

2019年3月9日(土)青少年健康センター本部三軒町ビルにて、バザーを開催いたしました。当日は齋藤環先生の講座の後に開催され、多くの方々に足をお運びいただきました。またバザー当日は茗荷谷クラブの参加者・スタッフの方々によるカフェも開催いたしました。その結果、総売り上げは64,768円となりました。

会員の皆様、また関係各位の皆様には多数の品物をご提供いただき、誠にありがとうございました。また当日、ご来場いただきました地域の皆様、関係者の皆様にも厚く御礼申し上げます。また、下記の皆様にはこの度のバザー運営において、格段のご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

フローリスト瑠様…たくさんのお花を品物としてご提供いただきました。
小川栄子様ご家族様…バザー時に野菜の販売をしていただきました。



CENTER NEWS

平成30～31年(敬称略)

11月

- 台東区若者育成支援推進講演会「ひきこもりに悩むへ」3日 講師:白石 弘巳(精神科医)
- ひきこもりダイアログ講座 24日 講師:齋藤 環(精神科医) 於中央大学駿河台記念館
- クリニック絆 電話相談員研修 27日 講師:谷口 万稚(米国臨床心理士)
- 茗荷谷クラブ スポーツ大会 於江戸川橋体育館 28日

12月

- クリニック絆 電話相談員研修 14日
- ひきこもりダイアログ講座 15日(講師・会場 同前)
- 茗荷谷クラブ クリスマス会 於かるた会館 19日

1月

- クリニック絆 電話相談員研修 9日 講師:谷口 万稚
- 茗荷谷クラブ 初詣 於東京大神宮・浅草寺 9日
- ひきこもりダイアログ講座 12日(講師・会場 同前)

- 基礎講座 後期 16日から5回 講師:藤堂 宗継(臨床心理士)

2月

- 「オープンダイアログ・ワールドカンファレンス」開催 3日(東京・安田講堂)、9日(京都・響都ホール)
- 茗荷谷クラブ ボーリング大会 於後楽園 15日
- 台東区若者育成支援推進講演会「家族に伝えたいこと」16日 講師:割田 大悟(ひきこもり当事者グループ「ひき桜」代表)
- 文京区ひきこもり等自立支援講演会「子どもがひきこもりで悩んでいたなら」23日 講師:野島 一彦(臨床心理士)
- ひきこもりダイアログ講座 23日(講師・会場 同前)
- クリニック絆 電話相談員研修 26日 講師:谷口 万稚
- 茗荷谷クラブ 文化祭 於シルクロードカフェ 26日

3月

- 青少年健康センター バザー開催 9日
- ひきこもりダイアログ講座 9日(講師・会場 同前)
- クリニック絆 電話相談員研修 13日 講師:藤堂 宗継
- 茗荷谷クラブ ゲーム大会with株式会社デジタルハーツ・プロゲーマー 25日
- 茗荷谷クラブ 社会参加準備講座「働くを通して」29日 講師:篠原 健太郎(NPO法人ワーカーズコープ)

発行・公益社団法人 青少年健康センター (会長 齋藤友紀雄)

〒112-0006 東京都文京区小日向4-5-8 三軒町ビル 102 TEL:03-3947-7636 / FAX:03-3947-0766
http://www.sk-net.or.jp E-mail: info@sk-net.or.jp